陳述書

大阪地方裁判所御中

２００７年8月２８日

氏名　●　●　●

住所　●　●　●

記

私は、「評価・育成システム」が学校の本来持つ、何人にも保障されている「人格の形成」をしていく役割を破壊し、結果として、子どもの教育をゆがめていくことを、今の学校の現場の実情と照らし合わせながら、以下の通り陳述します。

記

１、教員としての私の態度

私は、●●市で 31 年の経歴を重ねる小学校教員です。残り 3 年で、この生活を閉じることになります。

この教職についた当時、６０年代後半から７０年代前半にかけての高度成長期の歪みがピークに達し、社会を揺るがした緊張と激動を背景に、大阪の各地で行われていた差別の現実に向きあい、立ち上がり、克服していく同和教育とその教育運動の先進的な民主的な教育の実践が、私たちに大きな影響を与えていました。

そこからは、共に学ぶ障害者教育・戦争の加害を見つめなおし、互いが結びつく在日韓国･朝鮮教育、ヒロシマ修学旅行を服務平和教育等の多様な取り組みが繰り広げられ、さらに、教科書の無償や少人数学級や教職員の加配等の教育条件の整備、地域の人々のくらしを学び、互いを高めていく教育の大きなうねりを起こしていました。

まさしくそれらは、教育の原点を見据えるものであり、発展する教育の未来をしっかりと指し示すものです。私もこれに連なる一員として、それらの取り組みに参加してきました。

近年、子ども達を包み込む家庭を含む生活環境の大きな変化に伴い、学校は多様で鋭い要求に応えることが求められています。少子化によって、子ども達のつながりが減り、大人の目線で見つめられることが多くなり、小さな体に、過剰な期待が要求されています。早期の能力開発にかきたてられ、深夜までの塾通い、数多くの習いごとは、子ども達の発達をゆったりとくぐらせる時間と機会を奪い、反対に、成長を阻害させています。それは、子どもであるがゆえに、大人が思う以上に過大な緊張と圧迫感を長期にわたって潜在的にためこみ、「きれる子」を増やすものと

なっています。

父親の増加する残業と単身赴任、母親の深夜に移行するパート勤務は、寄り添える、安心のできる家庭をぎすぎすしたものに変え、離婚や母子家庭が増えています。親の帰宅時間が遅くなり、子どもも、深夜まで起きています。睡眠が充分にとれず、あくびが多く、集中して授業にのぞめない子どもが増えています。必要な栄養や体を動かす遊びの不足で、運動能力が格段に落ち込んでいます。生きていく基本条件すら欠けていくような身震いする状況が生まれています給食費や遠足などへの教育扶助金の支給者が世帯の三割を越える驚くほどの増加を示しています。

生活の見通しも見えない、不安定と緊張で苛立つ親の振舞いを、子どもは、語らずとも、しっかりと見つめています。それを通して、世間や社会を疎んじ、ますます他者との結びつきを拒み、内面に引きこもる傾向が、強くなってきています。粗野な人間関係、短絡で性急な行動、自暴自棄にいたる行動は、子ども達の心の叫びに違いありません。

私は、「教育の荒廃」が強く叫ばれる今だからこそ、様々なところで表れる子ども達の心相に触れ、誠実に向き合うことから出発しなければならないことの大切さを、かつて以上に思っています。「システム」は、今起こっている喘ぐ子どもたちの声を、受けとめてくれるものでしょうか。

2、「システム」は、教育を堕落へ導き、活力のある学校現場の崩壊を掃き清める

（1）「システム」は、学校から喘ぐ子どもたちを排除する

「システム」は、「学校崩壊」などの「教育課題の解決」をめざし、学校を『活性化』していくと述べています。

しかるに、現実には、このことの反対の方向に教職員を走らせることになるでしょう。「評価」は、「崩壊」がないことが、よしとするのが当然です。そのための一番の方策は、崩壊の引き金にならない子どもたちがいるクラスの担任にならないことです。どのクラスの担任になるか、教員たちの相互を疑心暗鬼にさせます。ここでは、協調や同僚性を高めるものでなく、対立を呼び起こします。

「システム」は、難行苦行のこうした取り組みを教職員から遠ざけていくのです。取り組んでも、取り組んでも「成果」が、すぐには得られないからです。なぜなら、待ち受ける課題は、労多くして、苦ばかりといっても良いでしょう。「格差社会」と称される歪んだ社会を背景に根ざした困難をもつ子ども達に真摯に向き合い、少しであろうとも、前向きの答・すばらしい「評価」を得ることは、至難の技です。道徳的な説教や、厳しい規範意識の押し付けは、かえって、子ども達の反目をかきたてるものになります。そのうえ、一筋縄での解決ではありえないことを「システム」では、１年間でやりとげろと強制します。

「システム」は、すぐれた「教員の資質」は、「余計もの」に関わらないことによって、作り上げられていくと、思っているのでしょうか。あっては、ならないことです。

だから、「システム」は、学力向上、笑顔いっぱい等の「見栄えのする」学校目標に設定されて

行くのでしょうか。そこでは、わかりやすい学力テストの点数や見栄えのする特色を売り物にする学校目標が立てられ、それを達成することの成果が、競い争われます。それに逆行する「問題行動」を起こす子どもたちは、学びの場所からから退出させられるでしょう。果たしてだれが、そこでの「育成」を引き受けてくれるのでしょうか。

青あざをつけてくる子どもに、担任がその異様さを気づきました。最初は、他の子ども達の物を何度もとったりしていたので、親に厳しくしかられたのではないかと、思っていました。一度ならず、何回も青あざをつけてくることが続きました。

子どもと話し合っても、遊びすぎて家へ帰るのが遅くなった。役割のご飯の用意ができなかった。「しかられても当然。」その子は、父子家庭です。懸命に父親を弁護します。

職員室で話題となりました。虐待を含んでいるのではないかと、職員会議がもたれました。口をつぐむ子に対して、まずは、親と話し合う家庭訪問をすることになりました。親や子どもたちがいるのがわかるのに、ドアーは、固く閉じられたままです。なかなか、解決の糸口がつけられません。学校から避けるかのように、たびたび欠席するようになりました。

たまたま、その親は、以前、私が高学年で受け持った子だったのです。五年生のときの忘れられない悲しい思い出が、ありました。楽しく、待ちに待った林間学校の日のできごとでした。出欠を確認する名前の点呼に、返事がありません。学校の近くにある家にかけつけました。玄関の上がり口のところに、用意されたボストンバックが、今すぐに、持ち出されるように置いてありました。子どもの姿は、ありません。建設現場を渡り行く、父親についていった、とのことです。誰もが共に経験し、談笑しあうことがらが、すっぽり抜け去る、しかも自分のせいではなく。これほどつらいことはないでしょう。放課後にやりあったキャッチボールの笑顔のことが浮かびました。

担任であった権威からか、こうしたことを伝えることで、親として、同様なつらい悲しいことを、子どもに絶対させてはよくないことを説得し、ドアーが開かれました。

私と担任、校長とで数度の話し合いをしました。兄弟三人の一番下の子は、重度の障害をもっています。生活相談所と連絡を取りながら、最終的には、親と子の生活を確保することから、子どもたちを児童施設に入所することになりました。子どもと親のつながりが遮断される寂しさが残ることになりました。

偶然の出会いが、良い方向に行くことになりました。しかし、そこには、「システム」の下での学校では、実現できない要因があります。結果に囚われない担任の子どもへの向き合う思い、がんじがらめでない柔軟に対応できる学校の雰囲気、「優秀」や「問題」の格付けされない教職員の協力し合う関係・虐待への研修の積み重ねが、子どもへの敏感な気づき、学校・教職員あげての取り組み、社会関係機関との連携などの大きな導きになったのだと思っています。解決が困難であり、見通しすらもてない課題であろうと、向きあっていくことの大切さを学びました。

（2）「システム」は、集団の営みで成り立っている学校を破壊させる

学校は、教職員の集団の営みによって、成り立っているところです。学年があがるときには、クラス替えがあります。それぞれの子どもの学力、運動能力、生育歴、友達関係、偏在しない住所、最近では親の間の関係や生活状況等の、細かい要素が点検されます。それには、教職員間に積み込まれた情報が、不可欠です。

授業では、熟達した専門性が必要です。小学校でも理科や音楽を中心に教科の専科制がとられ、分担して教えています。それは、教える側からの配慮だけではありません。多様な全面的な発達めざす子どもの教育に、対応するものです。

学校は、たくさんの教職員で成り立っています。その数だけが問題ではありません。国語が得意、でも算数が苦手。低学年よりも、高学年が向いている。読書より運動。青年と年長者。多様な能力と個性、色々な構成者で成り立っています。学校が「引き出し」を多くもつほど、子ども達に柔軟に対応でき、彼らの多様な面での成長を支えることができるのです。

以上のように、学校でのどの取り組みもいろいろな要素を取り組んだ集団で作り上げられます。学級でする授業もそのようにいえます。教職員も子どもたちもお互いが寄り添い、積み重ねられた結果として、今いるのです。ですから、なしえた成果を個人の「スーパー教師」に帰することは、絶対にありえないことです。相互で取り組んだ課題であるにもかかわらず、特定の教員だけに特定の「評価」を引き出すことは、分裂させ、差異だけを強調するものとなり、教職員の序列化を生み出します。同じことを取り組んでいるのに、分担だけが違うだけなのに、との声や不満が発せられるのは、当然なことです。差異をつけることの不当性が明らかにされたのです。評価が恣意に基づくものだからです。「意欲や態度」の抽象的・主観的なことがらしか判断の基準を見出すことができないのです。そして、評価者に「心を寄せる」ことだけが、絶対の唯一の基準となっていくのです。それに加わる給与上の圧力は、不純な動機を加えて一層の、あってはならない集団で営んでいる教職員に対立と憎悪を持ち込み、学校を支える基盤を崩壊へと揺り動かすものに駆り立てていきます。

六年生の不登校のこどものクラスの担任のときでした。ほぼ週の一日は、学校やクラスの配布物を家庭に持っていきました。事態が一向に改善されず、面と向かって会うことすらおっくうとなったのでしょうか、郵便ポストに入れておいてください、と言われたこともありました。でも、学校と断ち切ってはならない。親の想いを生で聞き、少しであっても、安心感を持てたら、この様子をこどもが感じ取ってくれるかも知れないと、通い続けました。でも、良い結果が出るとは、ほとんど思ってもいませんでした。

年度途中、一年間の不登校であった子どもが両親をともなって、突然、学校へやって来ました。みんなや先生たちに見られるのがいやなので放課後です。気晴らしをかねて親戚の家へ行ったとき、同じ年頃の子から、通っている学校の話を聞かされて、のぞいてみたいと思ったそうです。「僕の靴箱は、あるのかなあ」。いつ来ても受け入れることができる態勢は作っています。靴箱はありました。気分を良くしたのか、教室も気になりました。足が進みました。もちろん、机もあ

りました。おまけに、仲の良い三人組の二人が同じクラスでした。不登校の引き金になって対立していた子は、別のクラスでした。

仲の良い子どもの保護者は、私と懇意に話ができ、家族ぐるみのより一層励ましと包み込む適切な援助をえることができました。しかも、兄はクラスが違うものの同学年で、姉は、専科の理科で持っており、子どもに親しげな先生であることを告げ、背中を押してくれていました。不安が取り除けられ、不登校はいとも簡単に解消されました。

偶然に押し寄せた学校を訪ねたいとの機会を、うまくとり込むことができました。不登校時のマイナスの出来事を上回る学校がもっている楽しさ、仲の良い友達、保護者と担任の関係、希望を持ち続けた両親の思いが、プラスに転じさせたのだと思います。色々な混ざり合う要因をつないでいく共同の根気強い努力が報いられたのでした。

不登校時の担任が問題ではありません。また、不登校は誰にでも起こる、との居直りもしません。学校では、不登校のこどもに対応する委員会が設けられ、教職員もの誰もが心を痛めていたから、受け入れの態勢が作られ、待ち受けていたから、スムーズな対応が出来たのだと思います。

「システム」が機能すれば、不登校を生み出した教員は、他の教員と比べられる問題のある教員として「評価」され、その判定者である管理職に気遣い、そのことで、身も心も縮む精神的圧迫を持ち続けていくことになるでしょう。

３、子どもに寄りそう視点を失わず、共に成長していく教育をすすめるために、「自己申告票」を提出しません。

給与上の締め付けで、今まで反対を語っていた人も「忙しいこのときに書かなあかんのか」と愚痴をいいながらも、「申告票」を「自主」的に提出するようになってきました。でも、心の中では、ほとんどの教職員は、反対しています。何しろ、「システム」の試行の段階で、中学校の校長までもが、教育研究集会の代表挨拶で、生活指導やクラブで休みもなく駆け回っている教職員の姿を思いながら、評価者の苦悩をこめて、反対を述べていたほどですから。

私の職場も不提出のもう一人の方が、早期退職をなされ、今では、私一人になっています。でも、この裁判への関心も高くなり、その様子を尋ねたりする職場の人が増えてきています。及ぶ力はちっぽけなものに過ぎませんが、「システム」の導入の巻き返しの楯になっていこうとの意志をあらためて強くしています。

取り組んできた大事な事柄、学んできた教訓をあらためてかみ締め、取り組んできたものを、つぶされてはならないとの強い思いを固くし、前へ進んで行こうと思っています。

「私は日本人じゃありません。私は韓国人なのです。みんなの前で言いたいのです。」

卒業式を前にした生活ノートに、六年間の総括としての叫びでした。被差別部落出身の教員が「在日」で』生きる想いを受けとめました。それから、紆余曲折を重ねながら、その活動は、およそ 30 年を重ね、継承されています。今では、半数以上の小学校で、放課後に教室で、心を共

にする同胞の民族講師に指導され、民族の言葉、工作、料理などの楽しい時間をすごしています。

校区をこえたつながりの、1 泊 2 日の夏期学校（ハギ・ハッキョ）があります。学校では、孤立を感じていた子どもも、垣根を取り除かれたように、大はしゃぎで活動します。夜には、中・高・大学生や保護者も駆けつけ、思い出や苦労そして近況を語る熱い夜をすごします。冬には、各民族学校で取り組んだ舞踊や楽器演奏でにぎやかな発表の会があります。土曜の休日にもかかわらず 400 名の会場が埋められます。子ども、保護者、教職員の三者が集う、市における最大の行事となっています。舞台でスポット・ライトを浴びたこどもは、今では、どの学校でも行われている国際理解教育の「身近な国」の教材の中心となって、活動するようになっています。

私はおもに、事務方の一員として参加しています。裏方役で、途中半分からの参加で、設立の苦労や奮闘も経験をしていません。でも、『各地域ごとの民族交流会や運動会、文化祭、夏期学校な広汎な取り組みが進められています。こうした民族教育の礎を築き、実践を続けてこられた●●市の関係各位のみなさんの歩みは、大阪、日本の教育史の金字塔といえるものであると確信しております。」と、20 周年誌のお祝いのメッセージで、割引もあると思いますが、初代の民族講師で、当時は大阪の講師会の共同代表の方からの言葉を誇りに思っています。

私は、底辺を支える土台がしっかりすればするほど、高い峰が聳え立つ思いを強く感じました。大事にしないといけない子どもの叫びをしっかりと受けとめた教職員と励ましてくれる保護者との連携をこんなに力強く思ったことはありません。

子どもたちの生き生きした活動を守ることによって、生きていくことのすばらしさ、学び育てていく教育の大切さを、学んできました。

社会が続く限り、新しい課題が必ず次々と起こってきます。これからも、それを避けることなく、平和や人権を擁護していく課題に正面から向き合いたいと思っています。

教育は、「人格の形成」という高い理想を目標に掲げています。それは、有用な精神的・文化的活動が織り成す人間活動の無限に発達する可能性を認めているからだと思っています。私たちは、そんな高い崇高な使命に寄与することを受託されています。だからこそ、これに従い、背中を押され、紆余曲折を重ねながらも、実践してこられたのだと思っています。

「システム」は、共に学び共に喜び、そして、育っていく本来持っている教育の姿に、違和感を与え、葬りさせる生殺与奪権を握る冷酷なシステムに他なりません。

したがって、私は、この違法な「システム」を認める「自己申告票」の提出をしません。

以上、陳述します。